

ブラックバスの駆除

伊豆沼・内沼では1990年代後半から北米原産のブラックバス（以下バス）が増加し、在来魚などを捕食することで、生態系に大きな影響を与えています。沼からバスを取り除き、生態系を復元する必要があります。

ため池のような小さい池ならば、池の水を抜くことでバスを根絶できます。しかし、伊豆沼・内沼の面積は500haもあるため、干すことはできません。こうした大規模湖沼でのバス駆除は困難なことに思えます。しかし、伊豆沼・内沼ではバスを減らし、在来魚を増加させることに成功しています。その秘訣は何でしょう。

バスの生活史を把握した上でどの段階でも駆除を行うという伊豆沼方式が功を奏しているのです。卵は人工産卵床で、稚魚は三角網を使って、幼魚は定置網を使って、成魚は電気ショッカーボートや刺し網を使って駆除しています。中でも繁殖期における駆除は大きな成果を上げました。

伊豆沼の特産品の一つに小魚の甘辛揚げがあります。バスが多かったころは小魚が捕れないために出荷できませんでした。しかし、駆除の成果があがったことで、この特産品が復活しました。また、笹づけ漁という束ねた笹を水中に沈め、笹に集まったエビを捕る伝統漁法がありますが、この漁も復活しつつあります。

バスを減らすことができたのは、多くのボランティアの力によるものです。特に人工産卵床の設置や毎週行われる駆除活動ではボランティア団体「バス・バスターズ」の力が必要不可欠でした。もう一つ大切なことは、当然のことながら研究です。私たちはやみくもに駆除を進めてきたわけではなく、あらゆるデータを分析し、適切な対策を行い、成果を評価してきました。

バス駆除は終わったわけではありません。さらなる低減を目指してさまざまな対策を進めています。大規模湖沼でバス駆除の成果を上げることは未知の領域です。しかし私たちはそれに取り組み、他地域に先駆けて先行事例を作りたいと考えています。

嶋田哲郎

(河北新報・微風旋風 2015年4月30日掲載)